

ジェントルマンからサムライへ

——日本武士道野球における英国騎士道——

長谷川千春

1. はじめに

野球は、日本を代表するスポーツの一つであると同時に、日本人の精神風土を表す大衆文化としての一面もある。ロバート・ホワイトティング (Whiting 2009) は、米国野球界から日本野球に移籍した選手の様子やエピソードを紹介しながら、日本野球に見られる「和」の精神、野球に哲学を見る傾向、努力に限界はないとする練習方針など、野球から見る日米文化の比較を行った。ホワイトティングが着目したように、西洋人にとって日本の野球は異質なものと捉えられていた。またこの特異さを表すものとして、しばしば野球とともに論じられるのが、武士道である。

武士道は、現代日本の大衆文化にも影響を与える重要な概念であるが、古くから「武士道」という言葉が使われていたわけではない。9～10世紀の平安時代、宮廷貴族が文化的な生活を送っていた頃、武力を持つ集団は「もののふ」や「つわもの」と呼ばれていた。その後、支配階級に奉公する軍事的職能集団が「侍（さぶらい）」と呼ばれるようになった。「侍」が示す、貴族に仕える意味・役割に加え、社会的・文化的・時代背景に応じて、様々な要素が加わり、戦闘集団の理想像が徐々に形成された。その要素としてたとえば、鎌倉武士の弓矢とる身としての生き方、中世に出現した殺伐とした切腹の作法、戦国期に普及した山鹿素行（1622-85）らによる儒学・士道論などが挙げられる（今谷 2015）。そして、17世紀の武田家の兵法をまとめた『甲陽軍鑑』に、軍隊の理想像としての「武士道」の使用が見られるようになる。また、山本常朝による『葉隠』（1716年頃）では、様々な理想と現実の侍像を描くことで、実践的かつ哲学的な武士の理想像が提唱された。1900（明治33）年に英文で出版された新渡戸稲造の『武士道』（“Bushido: The Soul of Japan”）によって、理想像としての侍や武士道が日本国内のみならず海外へ広められることとなった。新渡戸の『武士道』は、日本にキリスト教のような宗教教育の代わりに武士道があったことを欧米人に説明したものであり、新渡戸自身も欧米の道德観に強く影響されていた。

このように武士道は歴史・社会・文化と複雑に絡み合い、時代によって兵学・宗教とも融合しながら発展してきたため、一様に論じることが極めて困難である。しかし、新渡戸の『武士道』出版以降、武士道や侍が一種のブームとなり、映画・文学・アニメなど様々なメディアを通じて使用され、一般的にも広く流布し、日本の大衆文化を語るうえでしばしば議論的となった。日本のみならず海外の研究者も着目し、多く論じられていることも確かであり、現在でも武士道研究は盛行し、様々な視点で分析が行われている（Turnbull 2000; 笠谷 2007; Miller 2011; Benesch 2014）。そんな中、トマス・ブラックウッド (Blackwood 2008) は、日本の野球と武士道との関連を、野球が日本に紹介される経緯、安部磯雄、飛田穂洲、佐伯達夫らの野球教育への貢献、

武士道と融合しサムライ化‘samuraized’する現代日本野球を説明している。さらにブラックウッドは、この日本野球の根源には、日本古来の侍文化や武士道よりも、19世紀西洋のアマチュアリズム、スポーツマンシップ、そして騎士道の要素に近いものがあつたことを看破している。ゆえに、ブラックウッドの考察をさらに深く追及することで、日本の野球を媒体とした英国騎士道と武士道の接点が浮き彫りとなり、騎士道・武士道研究（高木 1915; レゲット 2003; 小島 2010; 川崎 2014; Hasegawa 2015）に一つの視座を与えることができるのではないだろうか。

本稿ではまず、武士道がスポーツに利用された明治開国期の日本のスポーツ受容を概観し、安部磯雄が西洋ジェントルマンのフェアプレイ（fair play）の精神を日本の武士道野球に同化させた点を考察する。そして、ジェントルマンの理想像の起源である騎士道概念の発展もここで確認し、現代スポーツへと繋がる西洋中世から引き継がれた理想道徳について論じる。最後に、騎士道と武士道が現代社会において大衆化した状況を見ることで、時代によって理想道徳が利用されている例を分析する。

2. 欧米スポーツの日本化：ベースボールと武士道

武士道が野球に使用される背景には、明治時代の開国後の日本に押し寄せた文明開化や西欧化の波が大きく影響していた（Roden 1980; Guttmann & Thompson 2001; 鈴木 2001; Ikei 2011）。300年近くの鎖国を経た1850年代、日本政府はとうとう門戸を海外に開き、欧米から科学・技術・学術などの知識を取り入れるために、海外から多くの教師を雇った。このような状況を踏まえ、高津勝は、日本の学校教育が国際情勢を意識するようになったこと、日本人の身体的活動の少ないこと、欧米諸国に匹敵するような国技を求めている様子を説明している。高津は続けて、東京高等師範学校のフットボール部を紹介しながら、大和魂や武士道を取り入れながら欧米のスポーツを日本化する中で、特に野球に武士道精神を活用した経緯を明らかにしている。さらに高津は、元来日本的でない野球が入ってきたことを説明し、以下のように述べている。

外来スポーツの侵入に際しても、少なからぬ人びとが、国家的・国民的な自立の基礎をなす文化的な同一性の危機を感じ取り、伝統的競技の国粹的な改良や和魂洋才的な対応によってアイデンティティの危機を回避しようとし、さらには、スポーツ「日本化」を企て、「世界的競技」において勝利することに民族的な自立や飛躍への夢を託したのである（p. 54）。

明治時代の日本では、欧米スポーツを受容する際、それらを日本化する試みがあつたのである。国際化する社会を感じつつ、欧米のスポーツを取り入れざるを得ない状況下で、無理矢理にも日本的と呼べる要素を絞りだし、ナショナリズムの発露へと結び付ける傾向を読み取ることができる。ここで日本化の対象となつたのが、野球（baseball）である。

野球は、1872（明治5）年に、日本のエリートが集まる第一大学区第一中学と呼ばれた開成学校で、アメリカ人教師のホーレス・ウィルソン（Horace Wilson, 1843-1927）らによって伝えられた。野球がアメリカ人から伝わつたものであるため、日本人が野球に興じる際、外来のスポーツを行うための何らかの理由が必要であつた。そこで使われたのが、強烈なエリート意識、団

体主義、そして相手を打ち負かすべき敵とみなす勝利至上主義である。スポーツは娯楽や気晴らしではなく、エリートが団結し国を指導するための訓練と捉えられていた。有山輝雄が「ベースボールは、その背景にあるアメリカ文化をそぎ落とした「技芸」に矮小化され、逆に野球は「道義」を肉付けすることで武士道的野球となったのである」（p. 30）と述べているように、勝利至上主義や団体性に、日本の伝統的な古武士の理想像が繋がり、アメリカ風のベースボールが日本流の野球へと変容し、特に第一高等学校（以下「一高」と表記。）においてますます発展していくこととなる。日本の団体スポーツは、野球を始めとして試合に勝つために猛練習を行い、不撓不屈の精神をたたき込むための肉体鍛練や、技術訓練に加え、精神力の向上、さらには道徳教育とも関連付けられながら、教育手段の一つとなった。このように日本は武士道や侍など伝統的なキーワードを利用し、取り入れた異文化を器用にも日本化する作業を行った。しかし、野球においてはその作業が一部でぎこちなく行われ、極端な結果を生むこともあった。一昔まで帯刀を許されていた特権階級の武士の理想像が、スポーツ界に転化され、その観念だけが再度理想化されることになった。つまり、日本的な武士を理想とすることは、とりわけ一高の野球教育にとって都合よく機能したのではないか。

3. ジェントルマン教育と武士道

勝利を最優先する方針を取り入れた一高野球部は一時的に結果を出したが、効果は長続きしなかった。1904（明治37）年6月、プロテスタント安部磯雄率いる早稲田大学野球部は、創立後4年目にして当時の覇者であった一高に勝利した。安部は、西洋の思想やキリスト教に強く影響を受け、スポーツに対する考えやスポーツ選手の性格形成にも効果を発揮した。日本野球開祖の父とも称される安部は、野球を通して西洋の理想とする教育を行った。この根底には、安部のイギリス遊学をした際に目の当たりにしたパブリックスクールのジェントルマン教育がある。安部は、日本の詰め込み教育を憂いつつ、学生に勉学を強制しない英国の大学、特にオックスフォード大学における勉強は午前中、午後はスポーツなどに興じる学生の姿に感銘を受けた（平民社 2003, pp. 191-92: pp. 224-25）。さらに安部は、健全な肉体には健全な思想が宿するという考えを持つようになり、勝ち負けを気にせず堂々と試合に臨み、試合中は敵味方関係なく公平に競技者精神を重んじるフェアプレイやスポーツマンシップを日本の武士道と同一化し、称賛するようになった。たとえば、一高野球では勝利を最優先させるがあまり、試合や競技者個人への意識が希薄だったが、安部率いる早稲田大学野球は、創立以来部員の規則を持たず、部員の自主性に任せていた（片山 1958, p. 176）。安部磯雄の理想としたフェアプレイの精神は、一高流の優勝劣敗の武士道野球とは異なった形で発展していくこととなった。

では、安部が理想としたパブリックスクールの教育指導はどのような理念のもとに行われたのだろうか。リチャード・ホルト（Holt 1989）は、“Sport and the British”の中で、健全な少年の育成が良き少年の育成に繋がるというパブリックスクールの教育方針を説明している。ホルトはさらに、パブリックスクールの指導者が‘manly’を使い始めたことを説明し、以下のように続けている。

Sport played a central role in the achievement of the kind of **proper manliness** that parents and teachers desired. Manliness was emphatically not to be confused with sexuality; manliness was to be an antidote to the precocious development of adult male sexuality by providing a new moral and physical definition of what masculinity was. **True manliness was held to reside in the harmonious growth of the physique and the character side by side** (p. 89, 下線は筆者).

ホルトが述べる 'proper manliness' とは、肉体と精神面（性格）が共存し協調しながら成長することで宿る、パブリックスクールの教育で重要視された価値観のことを指す。当時の英国が少年に、男性的な力強さや過酷な状況にも動じない精神力を求めていたことがわかる。実際に、ジェントルマンは、上流階級としてみなされ、外交、教会、軍隊、法律、都市部の主要な会社など、国家の繁栄にとって重要な役職や職業に就くことが求められていた。さらに、ホルトは、'Fair play was the watchword of the gentleman amateur' (p. 98) とし、フェアプレイがジェントルマンの合言葉であったことを確認している。試合のルール順守はもちろんのこと、試合をするためには相手がいる、その相手の選手へも敬意を示すことにもフェアプレイの本質があり、これがスポーツをするジェントルマンたるゆえんであったということだ。このようなジェントルマン育成の意義や、「ゼンツル [ジェントル] マンとは其心術の如何にも優美で高尚なる人でなくてはならぬ」（平民社 2003, p. 86）と考える安部だからこそ、西欧の思想を柔軟に受容し、英国ジェントルマン教育を日本のスポーツ教育に適用できたのである（宮本 1984, p. 28）。

4. 騎士道を求めたジェントルマン

パブリックスクールが求めたジェントルマンの理想像は、中世から脈々と受け継がれた価値体系としての騎士道に起源がある（Girouard 1981, pp. 259-74; 中江 2006）。ゲイル・サベージ（Savage 1988）は "Victorian Britain: An Encyclopedia" の項目 "Gentleman" において、19世紀ヴィクトリア朝イングランド社会におけるジェントルマンの意味を説明している。サベージによれば、数百年の間、地方の農業に従事する地域の貴顕階級によって統治されていた国が都市化したことで、聖職者や、ホワイトカラーの職能集団が権力と膨大な土地を持つようになった。中産階級は、上流階級になるための必要条件として新しい土地を使用した。このような人々がジェントルマンに含まれることになったのである。さらにサベージはジェントルマン像について 'The figure of the gentleman has its roots in the chivalric ideal' (p. 325) と前置きしたうえで騎士道の発展の過程を説明している。騎士道を表す 'chivalry' は元々、フランス語の 'chevalier'、そしてラテン語の 'caballarius' に由来し、「馬」、「馬上の戦士」を意味していた。ヨーロッパ大陸で発展した馬上の戦士の理想像が、1066年のノルマンコンクエストで徐々にブリテン諸島に流入した。その一方で、アングロサクソンの武人文化が主流であったブリテン諸島の戦士は、主に馬上ではなく地上で斧を武器として使用していた。また彼らは、馬を移動のために使用していた。このように異なる文化で醸成した戦士の理想像が融合し、英語で騎士道を表す 'chivalry' が形づくられていった。8世紀頃の古英語英雄叙事詩『ベオウルフ』（"Beowulf"）で描かれるような戦

場での武勇、主君に対する忠誠心など、ある程度共通する戦士としての必要不可欠な資質に加え、時代を経るごとにキリスト教理想が付け加えられることによって、騎士道概念がより複雑化した。この騎士道の複雑性に、理想が積み重なり現実離れた理想像が創造されたことで、矛盾や葛藤が生じた。日本武士道もそうであるように、騎士道理想には限界があり、人間が完ぺきにはなれない虚しさや憂いを浮き彫りにすることができるのも、理想道德の興味深さともいえる。

たとえば騎士道は、南フランスで流行したいわゆる宮廷愛 (courtly love) の概念が加わり、文学作品に利用されることによって多様化した。中世の貴族たちの間では政治的な結び付き、政略結婚を強いられる女性が多かった。お気に入りの騎士と関係を持つことは、恋愛結婚が許されていなかった貴婦人にとって憧れであった。マリー・ド・シャンパーニュ (Marie de Champagne, 1174–1204) に庇護を受けた詩人クレティアン・ド・トロワ (Chrétien de Troyes) は、『ランスロまたは荷車の騎士』(“Lancelot, the Knight of the Cart”) を著し、騎士ランスロットが王妃グィネヴィアに絶対的な服従を見せる場面を描いた。主人公ランスロットは、王妃グィネヴィア救出のために、当時罪人が乗り、騎士が乗れば町中のさらし者となる荷車に、ためらいつつも乗る決断をする (Troyes pp. 211-12)。過酷な冒険の後、グィネヴィアはランスロットを冷遇し、追い払ってしまう。これはランスロットが荷車に乗ることを躊躇したことから生じた冷遇であった。『ランスロ』においては、騎士には貴婦人救出のためであれば恥さらしになることさえも求められることが描かれた。このような貴婦人への服従的な愛を絶対とする宮廷風恋愛が騎士道要素に加わった。

1469-70年にイングランドの騎士サー・トマス・マロリー (Sir Thomas Malory) が書き、イングランド最初の印刷業者ウィリアム・キャクストン (William Caxton) が1485年に出版した『アーサー王の死』(“Le Morte Darthur”) の「聖杯探求の物語」(“The Tale of the Sankgreal”) のエピソードでは、アーサー王への忠誠心よりも聖杯探求を優先する騎士の様子が描かれている。ガウェインは、自分の好きな飲食物が現れる聖杯の奇跡を目の当たりにし、この奇跡を探し出すためにアーサー王宮廷から一時的に離脱するのである (Vinaver 1990, p. 866.)。これは、宗教への熱狂的な興味が王と騎士の封建的な主従関係を超越する場面として解される。

このように騎士道は、時代によって変異しながら継承された。産業革命を経て19世紀には、過去を懐かしみそこに古き良き伝統を再発見しようとする中世主義 (medievalism) が目立つようになり、騎士道のコンセプトは、道徳を重要視するヴィクトリア朝社会の中でさらに変貌した。クレティアンやマロリーが隠すことなく描き出した騎士道の矛盾・不条理・人間的弱さは、複雑ではあるものの、その複雑性こそが騎士道物語に文学的で深遠な表現を可能にした。しかしながら、パブリックスクール教育ではこのような騎士道の複雑性は排除され、‘manly’なもの、つまりホルトが述べるような ‘proper manliness’ に集約されるジェントルマン像が理想化され、強調されるに至った。中世から発展と難化をし続け、複雑さを極めた騎士道理想は、ジェントルマン教育へ利用するために簡素・単純化されたのである。19世紀イギリス社会が求めた男性像には、愛に生きるランスロットらアーサー王の騎士達のような女性との恋愛が優先事項となる ‘womaniser’ としての男性像は求められていなかった。宗教観はトマス・ヒューズ (Thomas Hughes, 1822-1896) 『トム・ブラウンの学校生活』(“Tom Brown’s School Days”, 1857) で描かれ

る筋肉的キリスト教 (Muscular Christianity) に変容した (山田 1990)。安部磯雄は、このように変化するヴィクトリア朝英国における道徳教育の中でも、とりわけパブリックスクールでの生徒の品性を涵養するためのスポーツ教育に理想像を見出し、日本の野球教育と武士道に同化させた。英国で改変された男性の理想像が、日本の教育者によって再び創造され、野球に適用され、武士道野球を形成した。

5. スポーツ選手の神格化と一般化、そしてサムライ化

それぞれの時代の要請に基づき騎士道や武士道が活用されたように、これらの理想道徳のスポーツ教育への利用も状況によって変容する。19世紀イギリス男性教育の例もあったが、20世紀以降はまた異なった部分が見える。ここでは、現代のイギリスのスポーツとアマチュアリズムの諸相を探るデイヴィッド・クリストファー (Christopher 2006) の見解を元に論を進めることとする。

Until the 1960s there was a belief that sport was something to which a financial value should not be attached. Amateurism was seen as a virtue, and there was a traditional belief that sportspeople should compete for medals and trophies, rather than for prize money and salaries. It was an aristocratic, elitist attitude which showed a dislike of commerce, an attitude that had characterized British sport since Victorian times (p. 221).

この引用で見られるように、1960年代まで金銭的利益を目的とせずメダルやトロフィーを求めようとしたことは、騎士道における名誉の追求にも繋がり、特にアマチュアスポーツの世界で重要視されていた。ただ、この引用の後にクリストファーが説明しているように、現在ではスポーツは一つのキャリアとして考えられるようになった。このことから、スポーツ選手は少しでも良い契約ができるよう、国内のみならず国外のチームもその選択肢に含めることが多くなった。

たとえば、イギリス名門サッカーチームのマンチェスターユナイテッドのストライカー、ジョージ・ベスト (George Best, 1946-2005) は、スポーツ界で最初にメディアが着目したスポーツ選手とされ、彼の活躍の様子は 'popular hero' つまり大衆にとっての英雄と紹介されている。その一方で、ベストがそうであったように、スポーツマンの遊び人的な生活様式が、当時のメディアに取り上げられるようにもなった。一昔前まではスポーツを通じて理想のジェントルマンを育成するのが目的であったが、現代社会においては、スポーツ人気や需要が高まり、それを報道する方法やメディアの数も増えてきた。このことから、スポーツ選手の対価や名誉が、契約金や移籍金など金額として明示されることとなったのだ。このように現代では、経済的にも成功したスポーツ選手が神格化される一方で、スポーツ選手の私生活の人間的な部分も暴かれることがある。

現代イギリスのスポーツ選手を英雄視すると同時に彼らの人間的な面を見ようとする姿勢は、すでに中世の時代の文学においても観察される。クレティアンやマロリーのように騎士道の複雑性から生ずる不条理な葛藤を描く作品もあった。アーサー王宮廷でも最強と謳われる騎士ラ

ンスロットが、愛に失敗し、発狂し、荒野で裸になって過ごす描写は、まさに、ヒーロー的なスポーツ選手のスキャンダルや墮落したスポーツ選手のその後を追い求めるメディアに似ている。ところが、14世紀の『サー・ガウェインと緑の騎士』（“Sir Gawain and the Green Knight”）では、一味異なった騎士の人間性が表われている。それは主人公ガウェインが宮廷に帰還した際に宮廷の者が見せる笑いである。ガウェインは、約束通りに首を切られに緑の礼拝堂に赴き勇気を見せた。しかしいざ緑の騎士の斧が首に近づくと、恐怖に一瞬首をすくめてしまった。ガウェイン自身はこれを恥ずべき失敗と考えるが、アーサー王宮廷はこれを笑い飛ばし、あたたかく英雄の帰還を迎える。『サー・ガウェインと緑の騎士』において、完璧な理想を追い求める中で垣間見せる恐怖は、人間的な一面として許された。このように人間的弱さに着目する文化は、現代のスポーツ選手の生活様式に人間的な部分を見ようとする傾向に繋がっているとと言えるだろう。

日本においてもスポーツ選手を偶像視する傾向はある。特にそれが顕著なのは、野球選手を侍と同一化する現象である。2006（平成18）年から始まった野球世界一決定戦ワールド・ベースボール・クラシック（World Baseball Classic, 以下WBC）や、2015（平成27）年に始まった世界野球プレミア12（World Baseball Softball Confederation [WBSC] Premier12）など、日本の野球選手の国際大会出場機会が多くなってきたことも、野球選手の「サムライ」化に影響している。実際にプロ野球選手が中心となったトップチームをはじめ、これらの選手団は「侍ジャパン」と名付けられ、人気を博している。この状況について平方彰は、広告代理店である株式会社電通における自身の手がけたSAMURAI JAPAN ネーミングの経験を紹介している。平方は、1994（平成6）年頃から「監督名+ジャパン」と名付ける日本代表チームに違和感があり、WBC開催に向けた野球チームを象徴とする名称を急務に感じていた。日本ホッケー協会が男子ホッケー日本代表「サムライジャパン」とカタカナで商標登録していたことから、交渉・調整の末、侍が刀を持ったロゴと「SAMURAI JAPAN」の欧文表記が商標登録された（pp. 160-63）。そこには、スポーツ選手を日本戦士と見る風潮があり、また観客もそれを期待し、楽しもうとしていることがわかる。平方が考察しているように、国際大会の場で自国の選手たちを侍と見立てて、彼らを英雄化し、島国であることで頻繁には感じることはないナショナリズムを感じさせることができる。スポーツを武士の戦場と同一化し、国内の選手がサムライとして海外の選手と戦うことに熱狂を願ったメディア戦略があり、実際にそれが成功した例が野球界でのサムライ利用なのである。

このサムライ化は、名称のみならず、選手の行動にも影響することとなった。たとえば、2016（平成28）年8月に開催されたリオデジャネイロオリンピックにおいて、日本代表の陸上リレー選手4名が、レース直前に会場に入場しカメラの前で、右手を左腰に当ててから右上に掲げる行動をとり、侍の抜刀の場面を想定したパフォーマンスを行った（日本放送協会 2016, 0:15-0:17秒）。また、2017（平成29）年3月7日から3月22日の間に開催されたWBC第4回大会において、野球日本代表チームの外野を守る3選手が、膝をつき同様のパフォーマンスを行った（サンケイスポーツ 2017）。さらに言えば2018（平成30）年に開催された全国高等学校野球選手権大会においても、高校生がこのパフォーマンスを見せた（サンケイスポーツ 2018）。全国・世界を舞台にしたスポーツの大会で、国を代表する選手が、世界に配信されるであろうカメラ

の前でそのような行為を行うことには、自らの国の代表する国の象徴でもある侍の行為をアピールしたいという願望、メディアを通してテレビで観戦する人々へそれを伝えようとする意図が見て取れる。さらにここから、刀を抜く侍の行為が日本文化を象徴する一つの行動であり、それが日本国民のみならず海外の観戦者にも共有できていることがわかる。このように、現代社会において、中世に存在した戦士の行動規範だけでなく、その象徴とする行動もパフォーマンスの一部として取り入れられ応用されていることを考えると、侍が、日本そして世界の人々の共通の娯楽や大衆文化として受容され、歴史的な展開とは乖離しつつも、独自にサムライ化、英語で表現するとすれば'samuraise'したと言えよう。

6. おわりに

本稿では、まず西欧文化が流入した頃に、一高で発展した勝利主義を優先する野球とその方針から、日本の武士道のスポーツへの利用を分析した。そして、イギリスのパブリックスクールにおけるジェントルマン教育に触発された安部磯雄の野球教育を概観することで、野球と騎士道が、武士道を再利用するのに格好のツールであったことを論じた。さらに、ジェントルマン教育の基礎である騎士道概念は、中世から発展していく過程でキリスト教や宮廷愛の概念と融合し、複雑化したことを確認した。そして、19世紀ヴィクトリア朝文化の中では難化を極めた騎士道概念が、抽象化・単純化され、'manly'な理想像が掲げられたことを説明した。時代によって騎士道・武士道理想が変移する様子を踏まえ、現代のスポーツ選手を英雄視する一方で、大衆的な生活様式を見出し、その選手を取って普遍化する現象があること、日本のスポーツ選手の'samuraisation'の例、メディアからの影響にも触れた。

これらを踏まえ、本稿の結論は以下である。その時代の精神風土に沿うような形で複数の美德が付け加えられ体系化したイギリス騎士道と日本武士道は、19世紀のパブリックスクール教育に感化された日本の教育者とスポーツが媒介となり、接触・融合した。現在「サムライ」化したスポーツ選手や武士道の使用例を見ると、そこには中世イギリス騎士道に起源のあるジェントルマンのフェアプレイ精神を中心に、西欧文化を受容し続けた結果が見える。すなわち、現在武士道として認識されている日本の理想道徳には、英国騎士道の要素が含まれている、という見方も可能であろう。理想道徳は、文化・社会的背景、地理的事情など様々な発展の過程や国の事情でその都度変異し、固定化することが困難である。ただこれは、複雑な倫理体系ではあるものの、固定化できず流動的であることによって、道徳教育に利用されやすく、スポーツにも応用可能でもある。英国の騎士道的ジェントルマンの理想が日本化、武士道化され、武士道野球として再創造されたことを確認し、本稿を締めくくりとしたい。

引用文献

- 山輝雄 (1997). 『甲子園野球と日本人—メディアのつくったイベント』. 吉川弘文館.
 今谷明 (2015). 武士道. 『日本文化事典』. 神崎宣武, 白幡洋三郎, 井上章一編, 丸善, 130-31.
 笠谷和比古 (2007). 武士道概念の史的展開. 『日本研究』. 35, 321-74.
 片山哲 (1958). 『安部磯雄伝』. 毎日新聞社.
 川崎亨 (2014). 『英国紳士 VS. 日本武士「武士道」& 「騎士道」の歴史学』. 創英社.

- 『甲陽軍鑑大成』（1994-1998）. 酒井憲二編. 全7巻. 汲古書院.
- 小島道裕編（2010）. 『武士と騎士一日欧比較中近世史の研究―』. 思文閣出版.
- 『新校訂 全訳注 葉隠』（2017-2018）. 全3巻. 菅野覚明, 栗原剛, 木澤景, 菅原令子訳. 講談社.
- サンケイスポーツ（2017）. これぞ侍不動の4番！筒香, 2打席連続の同点打「勝てたことが一番」. 〈<https://www.sanspo.com/baseball/photos/20170315/wbc17031505040005-p3.html>〉. (2019年2月3日閲覧)
- 一. (2018). 金足農・吉田のシャキーンポーズは「やってずっと勝ってきたもの」. 〈<https://www.sanspo.com/geino/news/20180823/geo18082317210037-n1.html>〉 (2019年2月3日閲覧)
- 鈴木康史（2001）. 明治期日本における武士道の創出. 『筑波大学体育科学系紀要』. 24, 47-56.
- 高木武（1915）. 『東西武士道の比較』. 通俗図書.
- 高津勝（2008）. 日本におけるスポーツ受容：「創られた伝統」と世界システム・国民国家・生活世界. 『一橋大学スポーツ研究』. 27, 49-56.
- 中江桂子（2006）. スポーツマンシップの起源：社会史的一考察. 『スポーツ社会学研究』. 14, 47-58.
- 新渡戸稲造（2008）. 『武士道 Bushido: The Soul of Japan』. 樋口謙一郎, 国分舞訳. IBC パブリッシング
- 日本放送協会（2016）. 【NHK リオ】 ノーカットで400mリレー決勝！アジアの短距離史上 最速の走りを目撃せよ. 〈<https://youtu.be/2RWr2KwBoIY>〉 [YouTube]. (2019年2月3日閲覧)
- 平方彰（2014）. 『SAMURAI JAPAN の名付け親が明かす、もうひとつの“夢舞台”：“野球”が「ベースボール」になった日』. 日之出出版.
- 平民社資料センター監修（2003）. 『安部磯雄—平民社百年コレクション第3巻』 山泉進編集論創社.
- ベネシュオレグ（2004）. 発明された伝統としての「武士道」：日本の独自の思想なのか. 『言語と文明』 麗澤大学大学院言語教育研究科論集. 2, 91-107.
- 丸屋桂士（2014）. 『嘉納治五郎と安部磯雄—近代スポーツと教育の先駆者』. 明石書店.
- 宮本盛太郎（1984）. 『宗教の人間の政治思想（軌跡編）—安部磯雄と鹿子木員信の場合—』. 木鐸社
- 山田岳志（1990）. 筋肉のキリスト教徒とジェントルマン：概念の変容過程の問題とかかわって. 『愛知工業大学研究報告A 教養関係論文集』. 25, 55-63.
- トレヴァー・レグット（2003）『紳士道と武士道 —コモンセンスの思想, サムライの伝統』. 大蔵雄之助訳. 麗澤大学出版会.
- Benesch, Oleg. (2014). *Inventing the Way of the Samurai: Nationalism, internationalism, and bushidō in modern japan*. Oxford: Oxford University Press.
- Blackwood, Thomas. (2008). Bushido Baseball?: Three 'fathers' and the invention of a tradition. *Social Science Japan Journal*. 11 (2), 223-240.
- Christopher, David P. (2006). 9 Sport. *British Culture: An introduction*. 2nd edn. Abingdon: Routledge. 205-26.
- Girouard, Mark. (1981). *The Return to Camelot: Chivalry and the english gentleman*. New Haven: Yale University Press.
- Guttmann, Allen, and Lee Thompson. (2001). Part II Modern Times, 3 The Arrival and Diffusion of Western Sports. *Japanese Sports: A history*. Honolulu: University of Hawai'i Press. 67-95.
- Hasegawa, Chiharu. (2015). The Terms Chivalry in English and Bushi-do in Japanese: Linguistic heritage as implications of differences in cultural norms. *Multilingual Perspectives in Geolinguistics: International conference of the american society of geolinguistics in honor of its 50th anniversary*. eds., by Wayne Finke and Hikaru Kitabayashi. Raleigh: Lulu. 103-111.
- Holt, Richard. (1989). *Sport and the British*. Oxford: Clarendon Press.
- Hughes, Thomas. (2007) *Tom Brown's Schooldays & Tom Brown at Oxford*. Ware: Wordsworth.
- Ikei, Masaru. (2011). Global Baseball: Japan and east asia. *The Cambridge Companion to Baseball*. eds., by Leonard Cassuto and Stephen Partridge. Cambridge: Cambridge University Press. 155-67.
- Miller, Aaron, L. (2011). From *Bushidō* to Science: A new pedagogy of sports coaching in japan. *Japan*

- Forum*. 23. 3, 385-406.
- Roden, Donald. (1980). Baseball and the Quest for National Dignity in Meiji Japan. *The American Historical Review*. 85 (3), 511-534.
- Savage, Gail L. (1988). Gentleman. *Victorian Britain: An encyclopedia*. ed., by Sally Mitchell. New York: Garland. 325-27.
- Sir Gawain and the Green Knight*. (1967). Ed. J. R. R. Tolkien and E. V. Gordon. Rev. Norman Davis. Oxford: Oxford University Press.
- Turnbull, Stephen. (2000). Introduction: The samurai tradition and japan's military revolution. *The Samurai Tradition Volume1: The age of war*. ed. by Stephen Turnbull. Tokyo: Edition Synapse. 1-18.
- Troyes, Chrétien de. (2004). *Arthurian Romances*. Trans. by William W. Kibler and Carleton W. Carroll. London: Penguin.
- Vinaver, Eugène. Ed. (1990). *The Works of Sir Thomas Malory*. 3rd edn. Rev. P. J. C. Field. 3 vols. Oxford: Clarendon.
- Vines, Amy N. (2017). Chivalry. *The Encyclopedia of Medieval Literature in Britain*. vol. 2. eds., by Siân Echard and Robert Rouse. Hoboken: Wiley Blackwell. 462-69.
- Whiting, Robert. (2009). *You Gotta Have Wa*. New York: Vintage.